俳諧文庫
五十四

享保九年
芙角嵐雪
出来句集
一

壹

46
へ 5
1139
46

十七年ころハ経にも中
う月て時しる周雨文かた
贈られ候ま 於翠軒
枇杷の葉形も然うぬハ桜東寺
世兎よりくえらもと州陽
梅田ん割目愛町こたと
郷くらさせん 共子友朝治

へ5
1139
46

用由をよみぬ

谷藤亭主人

不しき所の遺忘ぶ
とふ彼舊思と諺字
我こそ世項仍て
高きに羅し観しよけ
鉤て霜の姉ちたき

廣堅つひとはしき
はるの事ありの李

雪堂
拾翠

短庭の雪深く鉄牛火燵かな　治徳

居士涅槃の折から讃を挽悼

能まて舟をつないつ雪の音　治湖

うかゝや乾ぬ枕化しても我　立志

跡ふかぬ雪中庵に舟を忘　山夕

声は夢秋はやまうつゝとも

其いは詩の叢とし千鳥かな　一漁

冬咲も院に姫売室の梅　青峨

菊咲も助るとて手向嵐引　貞佐

宗中生涯渉活句不渉死句とし
十七回の年忌を謝ス指要のまゝ
咲木の葉ふ散の餘情を調ふ

咲木の雨に捌 木のちふ花　仙鶴

笛も地かひかくたむ雲 柾　秋色

雀ゆしなのくさ壁の物語　周竹

中十日佛とあふ小六月　琴風

浮草のわちよふる納豆汁　百里

石蕗花

石蕗咲く土蔵のそれに翁日か　露沾

来る人は来ぬ君こそ石蕗の花　龍興

手拭と何とうか隠く石蕗の花　拾葉

出家窟は隠逸と貴し石蕗の華　後潤

初

翁の手刷て見る初氷　今雪

初茶遥麺棒そ手が稀　古流

侍者務子息そろす初　其夕

尾は家珠ひ杉かけ経の初功　而又

さく〳〵ゆ涌や池お瀧もしら迄　野渡
方百里鵐音つてきみかか　碧潮
余吾片田榁碎くかうすみ　一丸
氷まてふ九年の豆腐哉　都文

鴛

池に鴛夜ゝ旬而安楽し　楚弓
此橋に鶏の喜多し鴛の背　夜霜
歌とふ多篇重し雛鴛　舞鶴
鴛の羽やゆかしき母の針仕事　正与
極楽の姿も鴛おもみとわか　叙渠

思鴛の涌毎へ添ふね玉柏　如蒿
どころも生動く虹の枯芦　拾翠
わと打つ柄杓とる墳いかともか　子稲
めつらしとらふい羽二重の尻　和風
詩作者の買物戻嵯峨の月　如夕
栢原さく粟稗の族　仙水

木兎の耳へも届く舟呼ひ　山夕
ふる人は一分宝も古川　貞丸
あつさの宵ゆきかゝりにさ針　楓草
女師匠のたとへ　如蕎
ゆくそれも老て孫き調子哉　和風
山きつまりく星の居所　子猶
増植ゐ蝶の寺夜乃月　捨鶏
藤河へ申也ス　抱龍　如夕
白髪ぬく松貂女ね抱し　似兮
松手は玉椅　粒子踊子　山夕

霞たい口を吸へし梅に雛　貞丸
うくひすの名は墨の竹城　捨鶏
素焼して初しの息乃夕日和　子猶
蔓掛小木を深く氷上　似兮
桟戦て個和霜まゝ夜衣　山夕
漂庭の跡根明く茅背　和風
北氷の池殿ころ寸　弾き[illegible]　如蕎
ゆつるにも[illegible]天鵞絨子弾て　貞丸
吹上のちまわく折ふ京妾　如夕
節足もみ招くさつき　捨鶏

月のかゝ五十三里か京にたれ　和然
豹と見へし雪ぞ江の巴山　如蕎
春い海堀の紅く龍見　貞丸
椎しい溝漓いともかぬ浮子　山夕
夏そ屠る鶏も秋の魚い句か　惣翠
蝶のとまりも傍か傾城　子獅
東寺の塔と出る風呂行か　如蕎
大黒がきんぬりの元日　仙吾
秋空く鋪と松材にも心　貞丸
柳えし　推　径　挨しその　和然

水や夜手大坂雙紙の鶴見かけ　風子
しゝ乎紙抄紙　草足懐　可圭
笑様見んい猪手柿果く　貞佐
堀尾そへ女出　綱の松傍紀　孫子
倚子買ふて刀も止める萬の月　可達
風呂の時手い讃いふてもよし　貞作

鶴ハ脛に拂ふ花棧　松子
春雨日も褌ゆ濡て鎌　可圭
傍ハ蘆乃横た横へ葛　貞作
人へ心は葛が柱しろと　松子
かくらんの猫さへつみや鳥羽絵出　可圭
酒の筵に崇いこそとの牛　貞作
名も似た百姓聟ぬの門庇　松子
やきめし搶か福島の石　可圭
こまかひかき引ぬ廻り植の藤　貞作
比丘尼のうちより春は秋乃月　松子

志ゆくと谿し侘く虻の男めり　可圭
汐干ハ汐ハ押ッ寄しられ　貞作
濡ル二夜と馬賊の呉ニの則紀レ　同
おけ鳥ちたくため　松子
ゆくがとく退隠もヒの国女丹　可圭
うんとらそもかぜラ内ね戸　貞作
山ちの麿母十こやこ万左支　松子
醒スも枸杞茶を代に留ねへし　可圭
並んかとうの店逗旅の中嘉也　貞作
高麗ノ澡ぐ歯ハむさゞ(瓢)之　松子

どうしても手ハ濡らに桃の鞠　可圭
四五日前キ行月の客さハ　貞佐
気をすゝ師走乃肩衣ゆすり合へ　捴子
雑躰の為をわけハ流しき　可圭
緑抱は清けそ居き明もの　貞佐
せお出入為につけて出る　捴子
たゝみあけば喰ぬゝ繩を掌　可圭
伊豆乃水戸ともに比花の水戸　貞佐
先生も背折りに為る嵐乃柄　捴子
赤七夕者乃蛙とし也　可圭

水仙

名代お四季をも備ス一輪咲　舞校
水仙にもし隠れお席離　東和
水仙の襟をも清し冴の庭　揚声
嵐おに猶貴く水仙花　吾静
うきく藻の姉や水仙花　高車
水仙や武帝の座も南向　鱗二
藻のうぶ子附おしろ名仙花　斎谷

暖補

早梅の葉もしらぬ暖補かな　和鳥

西瓜より色の入らん作分　沾薄
蕾み見ぬ加減や雛の抱　睡鷺
足障ハ手枕の庶ハうん作分　桐橋
梅咲し花人ハ猿補ゆ花見と　節士

室の梅

操手も隠し藤むしろの梅　蘭月
筍箱に小豆入れる室の梅　雨蔣
蕃操手ハ折まく花そ室の梅　夕下
冠なみかゝやむしろの梅　鶴翅
いかりなき花とも見え室のんめ　丹州

達磨忌

雅と法目佛乗和達ア草　泉翁
達ア忌や蛛蛛の巣し清芦　舞豹
宗の斜法と掛絡や達アの忌　志雅
達磨忌やりも意たゝぬ糞掃へ　雁山

十夜

七ぬて十夜蝋燭その儀　和風
一雛の隠者ハ星は十夜から　酔柳
無数劫の鼬きかれ十夜かな　露白

霜

霜よとゝ鳥女房の夫見ん一つ宿らん　章風
とゝ鳴とうき十七日の跡乃霜　橘洲
初霜や見残す不庭の花　風戦
きえるもの見知らぬ世男哉　和葉
石子つゝ出迹見霜ゝら　梅林
松柏もとと初霜ちの人　沾瑤
初霜に国書の継目の継ぬ　白嚮
きえるも乃金まとはすも一句か　伴成
ことの多き芦にて錺る霜柱　何竜
初霜や鶯の形見乃人歌対　蔵六

掛も無く春石のきけの霜解か　松春
菜の花垣い霜ましや　貞佐
糀種いとよ細工まく　青峨
毎仕合ある夜の中なりつ　可圭
初霜くい草難き世て月見哉　貫二
根方の牡丹菜種知らずて　甚洛

古筆のいまた本居と築　宗作
机に向ひ袖の袂かな　素玄
売もやらぬ髪の人剃落し　可圭
犬神咄し秘密は前　貫二
狼は棟に縋き肩とり見れ　吉臨
泄漱く器は無色千万　宗作
実多家をつき擶子椎胡桃　素玄
慢臣見えけ瓜の番屋は　可圭
工夫する羽織の裏に為をかる　貫二
余谷酒ぬ雛波江の月　吉臨

竜さらに釣の鞨鼓と番鞨鼓　可圭
柳の糸に館の包丁　宗作
家股に鱸の鰭さへ上躅や　貫二
二帰りめに拾ひ出され枝　素玄
呉舟は繋細くさしかつき　可圭
出籠に着る川節の麗　宗作
恋ひ来れ已陀知らぬ絹上籠　貫二
常々無口の多とも合する　可圭
絶入も子姫の慰しみ山　吉臨
借家ならしき出に坊主し　松玄

沾浮ヶ筋骨高き鳶羊のふ　安信
縄よ足跡ハ借も大工も　未嶠
菊の月源氏にまで嵩手餅　素雲
日を経る氷に章種の源氏　贇二
桃灯ヶ秋の螳螂書ゝ淮粃み　未嶠
隠しおまおしく夏の蝉殺　可圭
时鳥ね人参も庵内の舟　松雲
厚屋の招嵩お針　狂云　贇二
碗の義とも松露ハ旨しく分　安信
时すら冬や濁巾との手捻　夕下

鶴の羽やまる一匁塩加減　秀翁
服巾をる殺く鳥川せん蔥　拾翠
床しけ乃國ハ桂のるけ出て　龍翁
縁をるけると呼びとし人ぐ利　貞磬
段の月ハ後の越向漸くそや　鷺竹
松本ぶりぞるる螺蠣しし東ゟ　貞佐

蔦かつら簾の外に這かけ　水惣
木魚の垢はいつ落るとも　魚尺
抑くみて琴柱も同し餅買　指掌
此旨を知る僑と語け　貞丸
補祢の若を埋しゝ尾を偏テ　諸翁
さらしけるや滅の園の墨　秀翁
余花もなし鱧は目も遅く　貞佐
淡泉たに兜宿泊の露り鳶　湾舟
粃も招く　雇ひ豆仏　魚天
皆願尊のつきる師走三ヶ月　水惣

纔ねはいつの世よりか乃し　秀翁
茸こともる翁の看板　指掌
帆ふくろ子やたくしの盥は夢　湾舟
女は誘ひ合せ小便　貞丸
呉舟の藿料は留りやみ　諸翁
挪子し雪路をといきまり　貞佐
大河に新寺町の第一可　水惣
出ルとひつゝ也鷺立の経ひ　魚天
登物にを乃の味噌とかへそ　指掌
風をうる結直の暦　諸翁

傘のやぶれめ見るも名牡丹　秀翁

猫出て爪とぐひとり三味線　鷺舟

何となく秋のこゝろもすゝむ夕涼　龍翁

枕いかゝ浮世のうきわかれの　秀翁

手まふれぬ饅頭屋のむしろ蔓　旦天

速さ子も流るゝ家の雛　為也

利酒は噂て猶も酔　貞佐

按摩一日結白くする　鷺升

巷双ふ路に出て蕎麦の筆　貞丸

何となくやこの夏かゝる薇　机斈

帰花

一生仕芭蕉の能も梅花　如夕

すゝきのや小松山閣し久ときも　和墨

初とそ詞は寄る帰花　箭子

梅咲の他とやいはん秋の雨　杜牛

結てもばかの卯の花の梅もれ秋の夢　我兄

時雨

涼て降椎や雑らし道　史常

梅晴が時雨も道日枝下風　不隣

ひきやたふ時雨とい茶筌賣　如枕

三井寺ハ割て来夷初時雨　蓮雨

去てとて時雨ていつる居士衣　泊橋

横川さ伯母の橋の時雨かな　白鳴

志ろやハけ鳴うけて鼻とこ　寸碧

笠三つ同し眠さそ橋時雨　葉二

うわさる藪に住作や小しくれ　芳洲

ともし時雨山に出ける芭小松　九杖

面白の袖し時雨て寺の石　一志

草陰に鳴の袖や行時雨　桃朝

吹されハ瓢ハ人を作眼時雨　巴人

椎の木ハ刷毛の割目を横時雨　鳳翠

嶋ちりそらにも目前語　拾翠

葱さそ逃ひの鼻もとめきて　蓮雨

くもれては笠雨する殿　東雲

大概はてらずして十三粒　竜興

とまれかくまれ末葉ハ茄　貞丸

秋切於筒の花さも嫁ゟ池　龍洞
戎島ハ天窓の神ゑ行くる　雨調
行ゟゟ子車急の茶屋料理　長虹
左京十日稲香く包十　和風
以中ハとも互の枚松の幟　貞佐
鉄福消ゟ楚大根ゟ窗　東里
よみうき門子鋤鍬ゟけ旌　执筆
怜くりみ子ニ車く居ル舟　蓮石
花盛目子ゝ祥ハかくせとも　東文
違仁禅寺蛇ノ権疎ル　露翠

うらひすハ柄杓ゟ漕ル年時の月　雨調
まちまちぬきもうにうき縁也　龍具
田舎人乃深もあうとよ歓心　只丸
渡摩の娘於出ゟ貝桶　龍洞
双六於目ハほそれても咲ゟ花　露翠
らてされもをぬ人ゟ人まる　東雲
松書とほひてても此智ゟ　雨調
河豚ても舞卯月之名　只作
天ゟ下安ゟ江丸のほとき寺　和風
花盛の雲さ葉もぬくゟ池　蓮石

吉原にあるも芭蕉見ゆるも文　梧翠
栽物の尾ぬく淡路島　長杜
子規深川の座て誤るの月　於洞
扉は五寸身木実出ス　鶯翠
沙呂補に包て出すさき延　読奥
気を是じる手紫柏の雨　雨滴
ふんとしも揮て梅は法理利　董雨
出労も本国も名を點し名匠　東雲
傳なる折物白態むかして　東里
梅ゟなかりさもあり　貝丸

茶花

此は茶の花の何ぞ似るの跡　琴雪
茶の花や淋しみ見きく村外れ　會同
唱一唱花の頃や茶の花し　呉班
茶乃花見にしや子梅の香　治梅
茶の花や一目に白き山つゞき　錦水
茶乃花や昌ゑれは古明　才錦
茶の花やとなれ新撰の相層　七磨
香は花は淡と綴つし茶の香　恭我

木枯

こがらしやこのも浦の筆配り　龍翁

凩や葛(?)潜(?)とくに乃わくる笆(?)　東柃

木枯や海と枕の旅(?)寝(?)筆(?)　鷺竹

おもふこの数(?)比(?)ハるに昔人　松滴

こがらしもどうも淋やるの面ッ　柳船

侘(?)して仲(?)風に色無しも　淅鷗

おもふや物まねく文枝の声　調柯

凩や笛のむしろ情文字瓦　蓮谷

こがらしやむしと觸る耳の底　几迹

木枯や雲子清勇(?)の借多事　芦文

雪菊

雪さくの香もそ染まるの地かなし　子稲

雪菊は行(?)もうけ(?)のこぼれて　東雲

雪菊や出窓の手(?)も玉第(?)　長虹

寒さや女の寒(?)え稀(?)今　文至

天は星や孫(?)子(?)隠居菊　可格

雪菊の小え(?)ほしもむらさき　提壺

寒菊やさくら(?)後の男面ッ　治渉

ひんきくや破れ中の窓(?)縁　白譯

雪中の雨ども貫(?)句(?)ひ分(?)　梁之

之草や冬開もみえき女龍　沾雫
窓きくにわの行冬や塩の枝　丶靡

冬牡丹

何ごとは後家の垣根や冬牡丹　輪糸
背枝にいのちや冬ぼたん　女 東里
ゆ寒すゝりを法冬ぼたん　芝場
福隠のふきのおつきや冬牡丹　白也
かきつきや白黄衣振冬ぼたん　秀朝
花も菊も思ひし冬牡丹　良子
徽子法子車の箱や冬牡丹　長松

居留く親愛しや冬牡丹　双舟
門扣く腥杞蠣　拾翠
宗花哉濃き人にまみれん　琴雪
きのふ乃天と宮羽見人乃　梁之
此處に月よりふ終傍栄　荷瑶
振ほに扇豆腐津穣ゝ　風戦

行鶴やもめ世月かやつれうち　渫々
里ふし寺は　様つゝ忘　野舟
山をぬくちも入にし首ゐみ　沙戦
笑ふ法　盡て揺を居らけ　渫々
㊁直く雪か霞の椋子話　野舟
をのく　小禽　咀の花鶯　荷瑶
いふすふ遊膳立ルはいがとゞめ　琴雪
こゝやこのたりけ月秋の秋　沙戦
されはこそ踊の呈袋ち座ん　荷瑶
ねけさと知らくれ須荻　琴雪

夕暮の花と猫眉ん子眉　渫々
拍子木忘れ　春ゆるく立　野舟
小僧いまゞ毎路ゟ紅金波　沙戦
世をらいまた見ず婿を押のけ　琴雪
袖口子批すも頭ら激津浪の　野舟
中すも泣か鯉に幾酒　荷瑶
老て家猫ゟ鳥好く古境牛　琴雪
けもない顔子享戒首記　沙戦
豊らうひへと下落か瞿粟句ふ　荷瑶
偕鶴ゝふまうと時の蝶　渫々

秋ふかいよ〳〵ちるも石の肌　御錢

彩日　二日　渦をかたしろ（形代）　野雪

摺鉢の音も梨子のまへつが月　好舟

もぎ　蔬子　僅筆や嗜し　渠之

衣かけ信と吉野は性見　荷聴

天をはつは雉も一夜ゝ　好舟

なく夜も鎮車の羽もれ　渠之

どちらも水から舟浮みの　地錢

花よ宮よふゝむきひの手つま物（高皇産霊）　野雪

落ちろる日和　影く筆　筆　荷瑶

鳧

鴨飛て冬まなや壱鴫　立峯

むれて浮きはせや鴨の運小舟　蒼湧

心侭と編珠緒子揚人羽白分　芳津

水を編と打出ゝ鴨のうき森　又魚

網代

三の月氷川漲はしてあけたる　魯琴

何を後れにうの端や猶見え（後更の杖つきてゝ紀ふしもとゝと）　白駿

紀ふしの侭直すかくて網代分　舟木

蓬莱

伏見への鶴も見えけり蓬莱か　嵩瑶

東風さや手にもとらぬ春の桶　久朝

心里は齢も若えけるかな　燕戸

満汐やさらは下草蓬莱漬　貫二

破弓

破弓多境八町あさほらけ　楓試

悪魔ふす羽二矢の末や破弓　清長

破弓ていうさ名も中にかつ隆十郎　露緑

女とも見えつ破弓の楽屋口　紫純

千鳥

鳥渓の宮枕浦よちとりか　琴月

聞す手みゆせいる千鳥かな　鳳缶

烏帽子着て住之江須千鳥　文虹

蛤のくちあく嘴へ千鳥かな　文水

須戸寺や千鳥千貫松五石　久流

磯枕夕ひの跡乃ちとりかな　東野

されば、こそ名のとほりの友千鳥　興志

おそらくや千鳥は松の立合せ　也白

大原の中よ一節夕ちとりか　貢橋

川風や古いむかしの夕千鳥　巴中

夜とともに淀川千鳥寺の西　仙水

白梅に椋鳥ふるや小松衛　柯木

冬鳥

水鳥の流れけりや世の拝領　雪江

鶴とりや空い羽風の冬畑　潭色

冬鳥や吹とよせける湖の波　松峯

水鳥や浮寝すゝせの袖さゝ　井魚

冬川や鳥の足切白扇子　李斎

冬鳥や鶴おれ下冬口　治石

あらしや流るゝ古着の人通り　繪風

霜おときおりし鐘の作雨　拾翠

君い渡やけふは御かして　長水

庭へ車のきしと丸める　常柳

太鼓丁とゝとて月夕　其夕

やき来俵むとおつる　椿井

乃んと出る鮭の庭から分あし　詞玉
胡座の形を似て給ふ　東和
柞といふ色も果ぬ鼈甲　双鯉
薪積まて床す雷　孫風
道とも云ふ雲ハ離れぬ月の雨　常柳
さえけるのこわれ橋姫　長水
楼梅ハさ法人減ても名ハ立ぬ　柊翠
落ハ猪にく逃る鼓の思　其夕
亀山ハ出月の五万石　東和
あつしの鳥乃隠田の人　詞玉

花子とく傍んも酒屋の杉袂　桂井
昔噂を遥く来れさの宮　双鯉
春風の土器輪軒人合ふ　其夕
忍のそて陶筆乃後　常柳
時鳥くしの楽屋ハ芳香参り　長水
川狩拝ろ百結廿然　柊翠
唯衣んも云うねきて鞠目付　孫風
二日も荷能わもあらん妃　桂井
美代とき穂らしく振流し　詞玉
薩芦くも手開帳の裏　東和

綉纈の窓に蔓く月影し　双鯉

杖もり鱧　兵部竜　長水

背子重ク日しぶひを丸合羽　桂舟

毛衣の金の丸月やつらき雲　孫風

穂も天桂ちり木綿夷　素和

行くしくれ牛の牛町　其夕

枕話に青き秋日の底の色　梓翁

華ぐみ裁し一文字切レ　双鯉

宝引は雑巾縫る毛のわと　雪柳

いつくしくあく絆子の毛衣　酒玉

白石人

枕ぬるゝ秋は木枯こし里鐘　沾雷

蓮葉の石に波をよせ　拾翠

蚊帳中の蒙腑一盤吹風して　沾洲

極の流れ関いなかり　得泉

鶴の月名かもしま舶艀(シラハヘ)擦ル　又泉

名は八郷と入新豫門　節文

九太夫も髪も鬚も打白し　沾山
子を懇望と思しては伊達　沾雷
宗鑑の眼みけりた大晦日　芦文
百の山まて米を見つけり　以旦
唯子に後い縁あり床の上　指琴
降いくのけく合歓の意　沾洲
後朝と是つぬ後朝かしこまり　得魚
路次の楓の蝉さえさ鞘　沾山
味噌として踊り上散る不　沾雷
月に山まて包丁の肘　芦文

革屋ケは少年ともゑの人　以旦
塩千のけふ踊と書き　指琴
重ねても七十二候まとく　沾洲
神農なくて裏菜座ヶ建　沾雷
出居り女子阿呆は兎も標　怡心
居なの笠お郎来子御名　以旦
一下け息の貴分つと入　芦文
名残御は神うつる寺　指琴
名もとる耳の咲ね浦距　沾洲
百年ケ上起切しそうなの　以旦

切なし漢テの床几ハ作時雨　沾雷

三ツ字まれは陶く済ケ　沾洲

乞食の濁まさる嵩ハ鍋の月　而直

苔刻む日の光り夢の実　沾山

みなぶり隣子と立ち筆節　拾翠

暮々もとも手も庸の武藤　沾雷

文なほとけまの旅もしかの霜　以直

十日の菊月師匠描く　芦文

蒼きの寄はひ力花の下　沾心

此若ま人る粉入のぢん　峯

飛ま浮世の者の藤楽か　右櫻

一泊知し座ぬカ姫里儀　拾翠

事足は口手粉の身控して　常柳

寓みかれや住めも浅きた　鶴背

夢のうら橋へもりも透し窓　對爾

休む枕へ終ス蝉　理圭

九

巴きれぬ旧手足跡秋の露　柳我
魂のこす舟ぞ川瀬　撰里
ともされは比丘尼も袖を汀かし　貞丸
まじはられは植竹や夏ル　貞佐
玉ほとのふ鋳さて谷し筆　帆筆
呑とみと掛屁を由きれし　太桜
元日の沖に帆も見は蔦いけ　鶴甯
朱室乃兎　三河ら来　祟尔
狗鐘に若手遅菊花にいつ　理圭
如おのこうえ碑を鈍る　柳翁

十

さしての袖と鉄漿名のこ　撰里
京町にわ定にほと雪月　嵩柳
あふら丹手あつう御飯と炊ここ　指雪
うち歯かう気旬報の名入　鶴甯
草蓬蛇の慶てお先くや　祟尔
桂るもなのめ家桂ゝ臺　撰里
義よ母ても十歩千一つ竜丸け　柳翁
朧篭の情さを清家流　理圭
横この泉へ先来橋車　太桜
棺条ての跡手二筋　貞丸

時雨るゝやさむ[illegible]ちりめん　芳杉

砂の聲古乃聲ハ下ゝほど　姥雪

月人ぞ祇園ハ渠に物好也　鶴背

鳥なきと鶯ハ将軍ホする人し　鶯尓

鶴の聲今しも見ゆる我の猫　兵作

流れは一座留るゝあり前備　太樵

嬰ハ見ハ背中で笑ひ隠ひ出　樸王

花さきて纒れ波ハ几光　柳齋

声も立たく御出出て孫生　理生

妻娘むとハ刀止殺日　芳柳

雪

雪垣や津の粉は加賀女　扇風

ゆき垣の庵ぬ中でも[illegible]ひ井戸　少時

目出度き雲借の口と鳴の雪　訥洞

其面ハ何処されとも

見ぬ顔や簾暮ごもちる雪　雨調

手のせんへ万里の雪もさけけ　白雨

採小雪寒く淋しきもし釜　壷峰

雪中や妻の名ふ謂ハおそなる　聊詞

とていもしてゝ見ゆる雪と炭　秋風

一きはもしの雪か厳島　仙衣
霜の雪小菜に束(タバ)ねてうれけり　塩竈
かきしるし昔との雪や墓の石　條谷
かくも目見ぬか雪丸け　(カツサ)也覧
舟留く浜雪抱よ海の端　点炭

三界無安猶如火宅

やすきといつもの一雪見ん涵　千寅

雪中庵の古跡を尋ねて
色ますしもおほけなくそ

十月も名和夜半嫗ゑ雪乃路　何虹

禄樹や尾の庭を雪車　壺月
志けく指桜に味噌にし　拾翠
此夕猿らか文字淋しくて　蓮之
おかし鳥とかくすみえぬ　安士
ほいやりと絶えて沖の月　咫尺
濱の寒さ一二三逐　晩孚

九

開帳の沙汰の極ハ角力札　安士
暮惜し抱清の宮参　蓮之
白粉や夜乃魂棄しそれ　揺響
ざつと阅子句ゟ内参ん　壺月
おや桃く枝ハ咲なけ目かれ　瓜天
浮気か朝飯帝の大黒　安士
羽童さし手をはてせ接便宜　壺月
物ことももとはば無の出気　瓜天
初恋の國へもいろ織月　蓮之
茶所を借りて壬生の狸業　揺響

十

人形の生て侍　花ゆかし　瓜天
雨て使ハ参し雛子也　壺月
鼻をつむ者もむしの大佳哉　揺響
無もそよく煙す百節　安士
宵から球を浮く寺の坂　蓮之
何そと人のふくれる様　揺響
読ても子の日世の日嫁ぐ　壺月
きれ経からハ夜を咲ひ付て　蓮之
大仏く負也すると身仕組　安士
飛傷床見出かしつかい　瓜天

起し来る楼男月の影　指翠

聖果茄子瘤子を摺ん　安士

秋は錦萬松原の棲霧　砥天

波打際の鰻取の襄　其く

露の滴る鬱さもおし世を経し　畫月

ゐるは労ぞ駕の牟怖　指翠

濡て何ぞ衣紫ねむも皆桃蓄　其く

神はうけたも枕もと來　畫月

地を潤す菜蘿の手夕貌の色　安士

ひろふかみどりは石の華　砥天

年くくよろんせらり雪の花笹　長水

袖々さ合せ名の紫柏　拾翠

世のくすも下女小女郎と暮くし　沾洲

邸々寧ましく舟暑の声　青義

手水に涼ぬしも晴て　仙里

好は好て出生好わり　衣芳

肩むと抱ル十月の涼し躍　大阜

何もしる篠そや額名門　潮声

おもしの鏡となれは池波　沙竹

七夕つし貴れは牽牛下牛　児峯

清涼の後人は處の下露　吸月

富士見ぬるゆへは四季の雪　随之

嫁てゝも里ほとしまつ拾よし　里橋

康の子絶えす小さき丈け屋　雷車

落葉は下々されは橋とちの苗　貞佐

飛く彼岸　傍葵の䑓　治助

異被承へ浅里直入てつ條　左業

おつきれ日和　艾ひとよ也　似至

まつ子の白髪ゆつきと寂しけり　海鶴

月さしてきり垣濃は下紐　大阜

雷鶴の月松とれは深ゆき　児峯

華ゆきさし　松乃名院　泗舟

葛の葉の我漂けり芳桜　青濤

還城樂を雷若手て　長水

菓子屋も灘行けりへこま内　梅響

して枝しより時雨晴い　吸月

小便は生き佐賀の狗小舟　雷車

鵜ときつく鶴ちの首　里橋

櫻蒲し十人の出家る雲出へ　保之
とる海しく館の中山　良仲
華つきも十二三から嫉妬原ど　大阜
此きねくは猶も入る　衣着
落葉にて文敷き猶く　仙臣
無しほと琵琶は飾られ詰　鶴聲
古跡はいと一綱しらすの月　如升
萩に海をは深くかこんなやく　露牽
雨風と東く踊はなくれど　里鶴
艶へまからす翁の少将立　呪常

ふつ波も手斧つかひも多かれ　吸月
宰ちらひにきるや鼓悔しき　栢響
六月は菓本もよ賀なけ　沐洲
阿弥陀との七く旧のはなれく　大阜
長刀手白綾纏し女房かし　長水
里と藤路は邂逅の暁　素鶴
口惜や口惜やとて浪花の味噌　露牽
所止く見く実も秋風　保之
樹根しら蠎は戻り舟の月　吸月
きのふの袖に冬嫌ふれ　呪常

村の名もきゝて二里も出て冬の月　衣菅

吹矢にはあまり鬼灯　貞作

初午は火のけもなし筋　隠之

菊見の座敷にまたもあり　里橋

節分や蠅も嫌ひや　大年

鬘紫にかゝる垣根の虫　洗舟

何とか蔭を芦原にて出し哉　衣菅

法師時雨して菅笠又眉　洒阿

想堅は鶴の巣乃うき出来　児峯

よし柱浮かし鞘やきの神　鶴彰

大橋の橋は仕方は切封し　桂翁

梧の竹乃後住梧にかゝ　吸月

家移り此所は霜包丁哉　里橋

鶴鮮団は走るも従へ　長水

日の暮は雁は月の鶯　雷車

唐には友に町の青ざし　桂翁

生鯛手に雉子の秋のあはれ哉　貞作

第一襟は手に取りにけり　似星

鴉鳴くには声も老ずに天文春　洒舟

六ッの地蔵乃埋る大雪　雷車

其後とい葉下に見ても露の犬　沾洲
鞭の笑声は先はしめて　衣笠
何りかもつゝだとはけ新地の穴　吉晴
蟷螂か出る寒よくつる　貞佐
江の鳥乃伝ふ蔦さへ月はなぎを　貴水
文字そゝろ根の声　了福
畠生の出曲りか放実あり　仙里
いとけなふの南京操り　大卓
舟あらは胡庄ゆるとも其のまゝ　瀬巌
清女らんべらへくとは　児峯

七天守根か中て飛まり丸　路月
夜は屏風のこうしろ　湖　陽々
名行螢と捕まへ猿子蹄き豆　貞和
地の声　止る寝　雨　惜春分　仙里
後手乃曲結西く吐霞し　精器
ゝざら見　売手　多換　吉晴
扇よりしとる狗上ル画の月　陽々
庭随子至急かは新蕎麦　沾斗
宝螺貝に筆収まけて秋の　瀬巌
鉄炮洲くし嵐人々見る　路月

おそしこの門は夏の来て地　衣笥
みふこそちらね猪子縮緬　長収
此竹の窓へ雨ふちやらし　見斎
凡そ世しらの緋さしの伊達　陽々
薮花の良つもる事も出　大阜
竹の盛り買ふり春衣　治雨
吉ッ男子羽織を召花鳥花　露車
縁は紙ごが閑二つ　鴻鶴
東山の春の姿はそのすこ　仙里
江戸ておとや浦島ヶ芦　湘升

天台は非人と入ぬ花の吟　青崎
修行の蕨の葉をそうし　里橋

落葉

山へ風は吹子落葉ふる　山鶴
猪子吹く礫落葉ふる　其流
川魚のひまてあるや村落葉　椿井
入れひを猪子出て此落葉ふる　志潜
神祇柿栽て饅落葉ふる　治巴
つき鐘の伴にはさ落葉　疎影

色も香も錦は筆に落葉哉　野涂

庭せよ山の影と落葉かな　東水

ふりそける名利の私ぞ落葉哉　標梅

打冬の門罷も幕さそ落葉哉　曽夕

さ深くとさ幕ひつ本の落葉哉　如格

昔ニさへ月の落葉かな　茲少

来数子和香の落葉ふ隔りね　松玉

花の跡茶人の酒ル落葉かな　奚堂

名残り袖にこの里や板下僧　安士

と染も落葉そ人は流の上　倫里

何もけに木々の梢たは落葉哉　古井

何ごろし衾海老ぬ海　拾翠

熊の手と筆は乾子鶴閑く　井奠

市多中年かくれなき庵ㇷ　沾洲

蛤子とあ藁とあ塩の名わ月　女 有川

難所ぐるまされ下り崖　貞佐

傘の内にはかくれし鳥羽条　捨鬘
被の裾ハ嘘する終　古井
おきせるの腹きまに頼が　貞佐
出入代ゝ操座立ッ　井旦
梅ッゝく鳴戸系切舟の鞠　沾洲
翁と燗しく向後とゞ　玉門
枝柏前ゟ中つも錫杖修く　井旦
もしハ用も月弘膏茶　捨鬘
露と待ちつゝ唐茶の一服まゝ　古井
やせ手の小粒胡桃割る音　貞佐

八百日も仲佛の報つゝれ　沾洲
雪踏く消ゆる井戸の富士　宵門
ときはゝゝきも去年ゟやいそしむなま　井旦
濁と何ぞ称宜の居風呂　古井
ふらつくといふけふ孫ちけ人　捨鬘
内裏へ奉ゝ這入菌え　沾洲
果子向けとかゝく顔ぬ笹粽　貞佐
歯ぐき怪キ津の黒竹　捨鬘
海をく手網ゆるがゝる灯影　玉門
抄く哥ゟ月枳尾上つき出ス　井旦

ヲ

蘭奢待に似たりと云事あるに　古井
一町として橋の蓮花　治助
めづらしと肩の鑓のまへしたる　玉川
比丘尼と茶を寐ぬ冬の日　貞作
通ひ路のとこつけ茶ハ将棊会　指翠
武さ臆病さ射台へ銭　吉井
大名ハまさ宵まで只酔　井旦
七切く買ふ牛よ下ヶる　治助
皆く一配符十むも一晴　貞作
海く何せく　橋く作　玉川

柏野

深田の汲手まつもし柏野が　湖夕
宮すゝ人ゝ老牛柏野原　誓雨
さまくの須臾まさる柏野か　大阜
蘆芽の由ゆゑ離しかのか　容竹
力と悩ら柏野の虫も何種か　治雪
佛自ら夜と示く柏野か　石水
消炭の匂いは柏野か　一遷
七雄のゑしまかひも柏野か　随之
京城野の柏さも名寄残気　江左

聖ハ枯くりさきさも六和か　素文
咲きりえいさ名家の枯の里　十竹
花ハいつとハ枯野の梅庵　文江

枇杷花

香に包人の細枇杷のさかり　呉笠
聲もなく梅ハ隠宜のひハの花　冏魚
丘まてハあり木の端よ枇杷のさかり　了遂
定の後の人の長し乱ハの花　貞松
手折てこそ栗嵐の穴や枇杷の花　義風
所以ありあり師の南能もしハの花　立圃

炭

炭くの色いくしいきさ勝る　素滌
茶俗ハ炭源ある手の山の郷　松里
石の火や十七日も巴炭　治鱗
なよ嫌て幾炭も古様の色　不醒
焼炭よ人く喝く開きあり　晋如
後とろ世よ炭売の茶掛ん　祖泉
舎利ハ句に雪中庵の炭俵　三幹
売炭の起き出てもうしるぶれ　立舟
中通り気もたれぬ池田炭　和推

炉開

炉ひらきや葦鶴のちり口　秋浦
爐開や左衛手海の音　作令
炉ひらきや心一月に露禄菴　思齋

楽子

在京の花ねさいるや楽子賛　季白
兎子老して醜房のゆく炉ひらき　金塊

冬籠

次第くに冬をまち見る冬籠　唐東
地の香の古き小袖やふゆこもり　女 白水

一

かしこ海の功德の山や冬籠　仙里
冬仙花し明の蝸菴　沾古
素人乃やせ枯は埋れくさ　貞佐
鰭の花華幅そし　長水
冬枯こき舟は瀬子夢の月　季喬
先く平の上海の嶋る豆　素丸

石わらし氣も幸に扁後ゝ　釵梁
るの海みと行く関ふ牛　仙里
階を作く故千札と名件み　治古
府の歎ときうめく尻ゟ　宍作
深川に杖定めば東向　長水
布袋の腹に寺楽いかう　釵梁
鳥なく呼べは燭油の継つひ　素丸
雷ふり向と大工婦のしく　李鶯
継うけて橋に踊枝かりしき　宍作
薮ふ草くゞり幸のいち雛魚　素丸

月影の猫はゆげふ過ゆ猫　治古
夜を深の娘　明りにき　釵梁
細ふすと冬き雨に太鼓幕　長水
もや里病に小豆煮こし　李鶯
律儀を作くこれはむ和本　仙里
すらしは蝶を聴に寄紀　宍作
巴旅の一まき陶かに佛さる　釵梁
たゝ山に向ひてふは何事　素丸
九天百ぐ九天の雑は見物こし　李鶯
橋の名翁は道にすゝ　治古

ゆく春の欄干に百両借しそかる　仙里
雪もゆるく踏京の鶯舞　古帆
名月は庵寺に出し十三夜　秋梁
鶴に怖く庭石鶺木　李鶯
袖にすり稲中人も草の花　素丸
ともかくもよし給花簑　比古
明月を惹筒に買足すやさ　貞作
紅梅千句世は翁けん　仙里
藪寺か花の衣店　長水
蝶の眠はまろつね杵　鯉尺

鶺鴒に孔雀の尾こそ氏紀も　水光
確なふ亀渡ス霜　雷車
撞出スと漢の一歩儀てあく　立志
広さに酔しふは面白い連　佳風
春秋月明ては風呂の吹お手　長水
清くかゞし河鹿の里　立舞

いにしへの猶い猶くし角力撲　佳枝
猫い寺と濱ス強ン塩　立志
朔日の人は我等の羽猶い　雷車
髪も掃除くちん（斑枝花）やうさし　水光
河骨と子にえれ眉作　立翁
切りてハ股の西ハ清稽　長水
喰ッ事ハ仕ンもはさく猪ハ耳　立志
れ人ひ畢（ヒク）うね箱　佳枝
白河ハ気やかぐし天の川　水光
色ハかつうれ麹男ぞや　雷車

肩衣も花ゆと交もうえ行　立舞
六信ゆ色（き）に巣に飛る鳥　立志
ぶらまけり網の姫ゆ子表の風　長水
佳色に菓子食ひさのもしん　水光
おゝそれなまうれ蝶の声　佳風
委も裸ね袖いもまうれ　雷車
づいともれを逆角のわどうき　立志
欠四ちんい置こくり　長水
小雨きハひぶんもつき張雛地　水光
鶏雛い枝りし龍の顋　立舞

陰に揺く旦ハ旅寝か柳　雷車
月に鐺とゝく岩橋　立志
蜀黍ハ醒ずくらべて見ん柳　長水
硯に糟芋の折おちし鳥　佳捻
柳碑の陰を照し源氏　立辞
古寺をも拗る甍でもなげけり　為覚
鳴くくと吹の字ハ流れし比笠風　雷車
けいハ油くく人の田うえ　立辞
ぬれかゝると手の葉の二先生　佳捻
そのが柳く菰の一筋　長水

枯柳

たむけには催く出枯枯柳　三花
西海もおくしく吹れ枯柳哉　秀澄
水に生は病い生れ柳　角調
ぶつ九越は落柳枯てこそ　帰文
ひとそめ風に車田へ枯柳　何文
大汐甚ふ車づき町浜枯柳かな　魚天

追加

ハツ立のかゝる枝降れやこと急ぬ　吟庵
目おそ蹲る枝流く吹欲さ　双鯉

京中庵の士篤より款しかりしといひしを

冬木皆むかし彼ア鹿象 三笥

霞とんで扇の肌に池洞か 補川

蝶帰や橋さし 萬尋河出され 竹堂

むつかしき二の句は何や玉霰 之雪

蓬路を涅まれも一の隣 素拾

六つには何の橋の雪柱 雪窓

揖かし此一夕や楷出花 喜学

菊咲裸さらしや目に寒き 訥子

十寸穂の中雪は年し手筆 舟月

萱昔の山門寒し鳩の声 半鯨

居士ときさひ寺にさたれ芝居の芝居に於ひし事を話し

と隣も紫宙長尺寂しさし 尼尺

山茶花

山茶花もや鶴の帽子をうけつべし 荷玉

山茶花もよ一ツは投しる娘哉 冨雪

山茶花の雨激しき素良哉 露甫

山茶花や鳥日まくらき第一隣 一葉

淋目利で山茶花作り下屋舗 和圭

山茶花やおくれけ車の舟の扇 可圭

此とし癸卯十月深川手に入る序てき文書を
得ミ三牌なんぞ其内ハ所謂桃青其角
嵐雪ゟて名誉の先達されば此尺
明ハ尽古技しおとを見て代々の作者遊ひ
折みえと以之も肥ろ蕉翁にして道様の
正眼をひらき亦世の俊才を服ス　渠もこて後
翁ハいとこの世子作ふるものハ其先の二字
奇なる句を殊を作ルの言々塗を布かる
又とも年を同しして世を辞し既十七回の昔語
となりたれとも梅しとあり句集毎の如とはうれ
勝へしや古境の情より門人の構ん様の數く

しきにひそり山家集の名ハ新なりもやさしくて去がて
なりに扣律ふ捨翠で中り因みて章共已遠悼の
一集を撰ふをて何ふうに句を記に出す世おり了乃
京色を述ミ後需に応すのミ

燕二軒

枯そとは咲て山家庵　桂檻　奥麻呂

手と携合せ十月の欅　拾翠

元舟乃纜と小舟のまゝ越て　貞佐

夜まハ居まい人なし一トふ　宗丸

玉兎欲綻ハそ流るゝ二階傍　捨翠

角力取もの名ハ先へ出ぬ　宗作

日はおのかもゝや果淡路　宗丸
髪の入日座く無ふとき　楷翠
一字の楊枝ヶ筆箇押しき　宗作
袖デ振リ滅ス朝ノ燈　宗丸
詠蔵み高幅とこれハ帳丹　楷翠
子臈六臈も浅ふ二百句　宗作
旅りして只る後の郭ヒ　宗丸
おもムくも出ス旅黒増桜　楷翠
金山み隠へ子きすハ白節　宗作
蛍ヶ百建キとうや宗論　宗丸

月やむ錬の貴み酒ノ乃　楷翠
根芹ハ夜乃か芹にも殿　宗作
子織内く化の足ハ稲荷山　同
嵩と足とは兄中の柄　楷翠
軍とも生へき車ヶ包丁　宗丸
子月みの足の羽二重に縁ヶ　宗作
到越乃女乗鯉虻求ハ　楷翠
根無におゝれ又ひ出さる　宗丸
窖みむめみまかとハ見れも　宗作
そみころ夢さむきし蜻蛉　楷翠

月に花すゞめがち、一陶り　只丸
手拭帀　鞴に縛　只作
まづしさ望みも無ぬ大儒こ　指馨
鰍に古縁うやくしけ才　只丸
十津川は雪こそあれ鵜ぐ時　同
音ハともなふと小唄まゐ上　指馨
豆腐皮たけ能も清一人乾燕　只作
雀に花也鸞中舟僧正　只丸
夫ー巻ハすゞ蒼香偶錯　指馨
呼ハ鳥に　庭子　沖鷗　只作

石巣岡会後鈔のくゆてありて
其角時あそしはさるに粕とあり
てといへて雪中に
介の香下延立て見遠せてと
孤句なしといへとも三則一
去花等しも信ず十七周也

古くより捨子杖あるからは
古墳に依て斧正乞のみ
ここに識して以浴席

享保八年冬

大久保一冨版

ことし文化三丙寅其角翁百回忌の追福
関東の俳士とそれぞれいとなむ中にも此一
其書は嵐雪十七回の追善の句を撰はれたる
を写されり実に光陰のうつるはすみやかにして
まして其百回をとふらひんもまのあたりなる哉し
古句に所謂年々歳々花相似たり歳々年々人不同
とかや十七回をとふらへるも今は誰かならん
今の人また百回をとふらひ人は誰なるを知る
べき事実にして人世のあはれなきことなるに
りのあはれしかし

文筆は大抵ある事の花集に似たりとて
梅花仏書記 己ヶ四十四年と続けり

信楽名之人偽し

こあきら字印と毛外をかえよのふみ

及ぬつ

イトヒナ